

今後の学歴社会と子どもの進路選択のゆくえ

－補習教育と私立中学の教育達成効果から－

古泉博之（武蔵大学大学院）

1. はじめに

戦前から大学への進学は憧れである世帯が多かった。戦後好況期を経てその目的が達成されるにつれ、大学に求めるものは、学問や学歴、将来所得の獲得だけでなく、特に高収入階級で本当にやりたいことを追及する目的で進学する傾向が表れ始めていると考える。そして、今後は、低収入階級も、やりたいものに支出するようになると予想する。

したがって、やみくもに学力を高め、医師、弁護士、教授、官僚をはじめとする社会的威信のある職に就くわけではなく、志をもって職に臨む者が増加することで、質の向上が見込まれる。また、低収入階級においても、予算制約により進路の選択先は制限されるが、それはむしろ将来の適職を示す指標になるとも考えられ、むしろ不満なく職務を遂行していけるようになる。今後、日本では、学歴へのこだわりが低下し、経済的な格差に対する評価はむしろ肯定的にとらえられていくことになるものと思われる。以上の動きを予想し、検証していく。

2. 大学進学ニーズの検証

モデルとなる式は、

$$C\&U_{ij} = f(TTS_{ij}, PrSSS_{ij}, DY_{ij})$$

記号

$C\&U_{ij}$: 1階級あたり国公立大学在学者数

TTS_{ij} : 1階級あたり補習教育受講者数

$PrSSS_{ij}$: 1階級あたり私立中学在学者数

DY_{ij} : 1階級あたり月平均実質可処分所得

下付記号の i, j は、 i : 収入分位 ($i = I \sim X$)、 j : 年次 ($j = 1980 \sim 2014$) を表す。

使用する資料は『家計調査』であり、時系列と収入分位をクロスセクションにしたパネルデータ分析とする。ただし、大学進学ニーズを検証するため、Dummy変数を使用し、それと定数項との総和を求められるようにする。すなわち、上述のモデル式に、収入階級十分位のうち、第I～V十分位のときはDummy変数=0、第VI～X十分位では、Dummy変数=1として、説明変数に代えて、回帰分析をする。符号条件はすべて正であると予想される。これによる残差分析をし、構造変化のあった時期で期間別の分析をする。

表1 補習教育と私立中学の教育達成効果
- Dummy変数有り

(第I～V十分位=0、第VI～X十分位=1)

	1980-2014(2007)
--	-----------------

被説明変数 説明変数	1 階級あたり国公立 大学在学者数	の塾や私立中学は受験に対しての進学準備 機関としての性格が特に強く、高い進学実 績を求めている。その塾や私立中学を最大 限効果的に活用することは、学歴・学校歴 の獲得を意識していると考えられるからで ある。そして、低収入階級は、バブル期に は、ある程度の成績を修めたら、高収入、 あるいは希望通りの就職ができることへの 期待からか、塾・私立中学の大学進学効果 は小さかったが、2014年に近づくにつれそ の効果は大きくなってきている。すなわち、 学歴・学校歴を求めて、家計に負担をかけ てでも大学進学を選択しているものと思わ れる。高収入階級を低収入階級が追いかけ る形となっている。そうすると、2014年に に向けて高収入階級では、塾・私立中学の 大学進学効果が、他の期間と比較して少し 低下するのに対し、大学進学ニーズはいよ いよ高まることから、学歴・学校歴とは異 なる別なものかを求めているとも考えられ る。その一つが、自らの適性、可能性を求 めての大学進学である。
定数項	-165.681 (-3.573)***	
1 階級あたり 補習教育受講者数 (TTS)	0.168 (4.126)***	
1 階級あたり 私立中学在学者数 (PrSSS)	2.170 (10.008)***	
1 階級あたり 実質可処分所得 (DY)	0.166 (5.145)***	
Dummy 変数	144.669 (4.128)***	
\bar{R}^2 (自由度調整済み)	0.853	

注) ***は 1%、**は 5%、*は 10%水準で統計的に有意である。

符号条件 ($\partial C\&U/\partial TTS$ 、 $\partial C\&U/\partial PrSSS$ 、 $\partial C\&U/\partial DY$) も予想通り、すべて正の値を示している。そして、補習教育と私立中学では、私立中学の方が大学進学効果は高いことが示されている (0.168 < 2.170)。大学進学ニーズは、低収入階級で、-165.681、高収入階級で-21.012 であり、高収入階級の方が大きいことが確認できる。また、期間別の分析でも、低・高両収入階級で、どの期間も私立中学の大学進学効果の方が大きいことが示される。

高収入階級は、バブル期とバブル崩壊から平成不況期において、塾と私立中学の大学進学効果が大きくなってきている。この時期、高収入階級において学歴と高収入を求める意向が大きかったと考えられる。この時期

3. おわりに (続き)

大学進学ニーズは、低・高両収入階級で、現在に向けて大きな高まりを示している。しかし、塾・私立中学の大学進学効果は、現在にかけて、低収入階級では大きい、高収入階級では小さい。したがって、高収入階級では学問や学歴、将来収入だけではなく、自己の適正・可能性を求めて大学進学をしているものと思われる。その点を確認するため、大学進学目的を特定する検証をする。